

生徒をどのような大人に育てたいか

— 地域・同窓生とつなげるキャリア教育の実践と成果 —

国語科 岡 かなえ

情報技術革新に起因する社会経済・産業的環境の国際化、グローバリゼーションの影響により、キャリア教育の重要性が叫ばれるようになってきている現在、本校で「キャリア教育」にどのように取り組んでいるかについて記す。

本校は文部科学省平成26年度「スーパーグローバルハイスクール (SGH)」事業で研究開発校に指定されて5年目(最終年度)になる。この事業の成果として、本校が地域及び金沢大学、同窓生とのつながりを今まで以上に多くもてるようになったことと、生徒一人ひとりの発表の場、評価される場が増加したことの2点が挙げられるだろう。しかし教育とは、「学校で提供したものを生徒が獲得して終わり」であってはならない。「学校教育を終えた後も、学校教育で獲得した力を別の場面で活用したいと思い、またいろいろなことに関心を持ち、新たなことに挑戦する」生徒を育てることが教育者のつとめである。つまり私たち教育者は、生徒一人ひとりを生涯にわたって学び続ける大人に育てる必要がある。

本稿では本校のSGHプログラムの実践及びその学び以降の生徒の自主的取り組みについて以下の順で記していく。

- ①SGHプログラム「地域課題研究」→自主的な地域活性活動「金沢まちづくり学生会議」への参加
- ②SGHプログラム「グローバル提案」→自主的な「SGH全国フォーラム」・「SGH甲子園」への参加
- ③SGHプログラム「グローバル・キャリアパス」での同窓生との交流→自主的な「新聞編集局」の取材

キーワード：キャリア教育 SGH 地域とのつながり 同窓生とのつながり

1. はじめに

現在、地球規模の情報技術革新に起因する社会経済・産業的環境の国際化、グローバリゼーションの影響により、キャリア教育の重要性が叫ばれるようになってきている。

生徒たちは、社会環境の変化、経済の構造的変化、雇用の多様化等から自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくくなっている。また、環境の変化から人間関係をうまく構築できない、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない生徒たちも増加している。このようなとどまることなく変化する社会のなかで、生徒たちに、

変化を恐れずに変化に対応していく力と態度を育てる必要がある。

では、そのために学校教育で何をすべきであろうか。学校教育が生徒たちに将来自立した社会人となるための基盤となるためには、「子どもたちに学ぶ面白さを体感させ、学びへ挑戦する勇気と方法を身に付けさせ、未知の知識や体験に関心を持たせ、仲間と協力して学ぶことの楽しさを体得させる」ことが必要であると考えます。

そのためには、学校だけでなく家庭との連携、地域との連携、関連機関との連携を通して、同じ目標に向かう協力体制を築くことが不可欠になる。

本校は平成26年度「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」事業で研究開発校に指定されて5年目(最終年度)になる。この5年間で、総合的な学習の時間のプログラムとして、<①地域課題研究→②異文化研究→③グローバル提案→④グローバル・キャリアパス>を、毎年改善しながら確立することができたといえるだろう。そしてこの事業の成果として、本校が地域及び金沢大学、同窓生とのつながりを今まで以上に多くもてるようになったことと、生徒一人ひとりの発表の場、評価される場が増加したことが挙げられる。さらに、総合的な学習の時間だけでなく教科のSGH化を進めたこともあり、生徒の調査力・分析力・課題発見力・課題解決力・交渉力・コミュニケーション能力・プレゼン能力等を向上させることもできた。

しかし教育とは、「学校で提供したものを生徒が獲得して終わり」であってはならない。「学校教育を終えた後も、学校教育で獲得した力を別の場面で活用したいと思い、またいろいろなことに関心を持ち、新たなことに挑戦する」生徒を育てることが教育者のつとめである。つまり私たち教育者は、生徒一人ひとりを生涯にわたって学び続ける大人に育てる必要がある。

本稿ではまず、本校のSGHプログラムの具体的な実践と、どのように改善したかについて記す。その次に、その学び以降の生徒の自主的取り組みについて、以下の順に記す。

- ①SGHプログラム「地域課題研究」→自主的な地域活性化活動「金沢まちづくり学生会議」への参加
- ②SGHプログラム「グローバル提案」→自主的な「SGH全国フォーラム」・「SGH甲子園」への参加
- ③SGHプログラム「グローバル・キャリアパス」での同窓生との交流→自主的な「新聞編集局」の取材

2. SGHプログラム1年次「地域課題研究」の実践とその後の生徒の自主的活動

(1) 71回生「地域課題研究」の実践・改善点

(1)-1 実践の概要

1年時の4月～12月の「地域課題研究」の学習は、「地域や人々を幸せにする方法を提案することによって、地域課題について主体的に認識を深めること」を目的としている。

学習内容としては、①【地域調査：加賀市を中心として金沢市より南の石川県・北陸地域を対象に、その基層文化や地域的特性を調べる。】、②【先行事例調査：研究対象に定めた地域の表層文化や地域特性を理解した上で、地域課題への取り組み例(先行事例)を調査する。】、③【研究機関・企業との連携：現在または将来における地域を認識し、金沢大学・北陸財務局・地元企業・自治体の協力を得ながら、地域理解を深める。】、④【実社会への提案：地域の抱える課題を解決するビジネスプランを、企業や自治体・研究機関等に提案する。】である。

71回生では、①「外部機関との連携」、②「調査方法の質の向上」、③「評価」に力を入れてプログラムを開発した。以下にその内容を記していく。

(1)-2 外部機関との連携の強化

①「日本政策金融公庫との連携」

実社会で通用する提案をすることを念頭に置き、「ビジネスプラングランプリ」(日本政策金融公庫主催)、「地方創生☆政策アイデアコンテスト2017」(内閣府地方創生推進室主催)、「中高生未来創造コンテスト」(読売中高生新聞・日本政策金融公庫主催)への応募をカリキュラムに取り入れた。応募の過程において、「既存の商品やサービスとの違い」、「具体的な販売(提案)方法・公告方法」、「収支計画」等について考える必要があったため、昨年度までの研究内容よりも、より具体的な提案となった。これらの取り組みのなかで、日本政策金融公庫の方2名に3度お越しいただき、講義及び個別指導をしてい

ただいた。1度目は5月に「ビジネスプランとはどのようなものか」について講義していただいた。2度目は7月に「顧客を絞り込む方法」、「アイデアをプランにする方法」等、班ごとに具体的に指導していただいた。3度目は9月に「収支計画の計算の仕方」等、班ごとに細かく助言していただいた。日本政策金融公庫の方には、2・3回目の訪問の前に資料を送付し、授業当日に班ごとに対応していただいた。収支計画の立て方等、教員の持っていない専門的な知識で生徒を指導していただき、より現実的なアイデアにすることができた。

②「北陸財務局との連携」

北陸財務局の方に10月に3度お越しいたいただき、生徒のプレゼンの評価をしていただいた。「課題設定は適切であるか」、「課題と提案内容に隔たりがないか」、「現実味のない提案になっていないか」等について評価していただき、「どのように改善すると、より現実的な提案になるか」について具体的に班ごとに指摘していただいた。北陸財務局の方には事前に資料を送付し、プレゼン後に細かく講評していただいた。北陸財務局の方からの助言を受けてさらに改善したプランを、12月にはレポート作成という形で発表した。また、2月に、金沢商工会議所女性会のイベントにおいてプレゼンを行った。このように、学校外での発表や外部機関の方から評価していただく機会は、生徒にとって新たな視点を持てる大きなチャンスであった。



写真1 金沢商工会議所での発表

③「石川県能登町企画財政課との連携・金沢市市民協働推進課との連携」

10月、11月に行ったプレゼンは、能登町企画財政課の方及び金沢市市民協働推進課の方にも見学していただき、「現実的にプランにするための工夫」等について指摘していただいた。

(1)-3 調査方法の質の向上

①「地域経済分析システム『RESAS』の活用」

調査する際に地域経済分析システム（RESAS）を活用するよう指導した。地域経済分析システム（RESAS）の活用は、応募した「地方創生☆政策アイデアコンテスト2017」（内閣府地方創生推進室主催）でも指定されている。生徒たちは目的に応じてデータを活用し、プレゼンの際にもデータを提示し、説得力のある提案ができた。

②「金沢大学との連携」

地域課題研究の導入として、5月に「地域再生の課題と地域資源アプローチ」というタイトルで金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センター長佐無田光先生に講義をしていただいた。「北陸経済の特徴」や「地域再生のために何をすればよいのか」について具体例を挙げて説明をしていただき、生徒に学習の見通しを持たせることができた。

③「校内の指導体制の改善」

本校では総合の授業に8人の教員が携わるという体制になっていたものの、70回生までは、実態はメインとなる教員が各クラスに一人で、それ以外の5人は補助的な役割であった。71回生では、同じく教員8人体制であるが、6月から10月までの班活動の期間は、担当教員全員が3～4班を受け持って指導を行った。8人全員が班を受け持ったことで、よりきめ細かく各班に助言ができるようになった。

④「加賀現地学習の内容の改善」

昨年度までは現地学習での訪問先を教員が決め、その中から生徒が選んでいた。しかし「自分たちの班のテーマにちょうど合う訪問先がない」という声

が生徒から多くあがっていた。そのため71回生では、班ごとに取材先を2ヶ所以上決め、事前にアポをとって取材に行くという内容に変更した。9時に金沢駅で点呼をとった後、17時に加賀温泉駅に集合するということを生徒に提示し、その間の行動については事前に綿密な計画書を作成させた。この取り組みによって、それぞれの班が行きたいところで詳しく話を聞いており、よりも有意義な時間が過ごせた。併せて、計画を立てる力や計画的に行動する力も培えた。

(1)4 評価

①「評価指標の提示」(学習の見通しを持たせる)

毎回授業の初めに評価の指標(ルーブリック評価)を提示し、学習する際に意識するべきことを明確にした後に授業を行った。また学習の最後には自己評価を記入し、自分たちの学習の振り返りをさせて、一人ひとりの学習に対する意識を高めさせた。

②「生徒の『伸び』とより細かな声かけの必要性」

71回生では、入学前の課題として地域課題研究で行う同じテーマ「地域の課題を見つけ、提案する」というレポートを課して、総合の学習前と学習後の変化が生徒自身にも意識できるようにした。生徒たちは皆、「調査方法・データの活用方法・プランの作成方法・収支計画の立て方」等について「以前よりも知識が増え、やり方も分かるようになった」と答える。一方で、「難しい」「前よりも分かるようにはなったけれど、どうやってプランにすればよいか分からない」と答える生徒も多かった。

③「外部評価の位置づけ及び評価方法」(成績)

71回生では、複数のコンテストへの応募、複数の外部機関による評価を取り入れているが、それらの結果は成績には関係ないものとして位置付けた。総合の授業では課題発見力・課題解決力・表現力・協働性について評価し、評価指標については生徒に毎授業で提示している。71回生は8人の教員で27班を分担しているため(教員一人が15人程度を評価す

る)、個人をきちんと評価することが可能となった。

(1)5 コンテスト入賞テーマ

①ビジネスグランプリ ベスト100入賞 2チーム

- ・「ストーンビジネスで小松に潤いを！」
- ・「酒峰コマツ～白山が恵む地酒で小松市を豊かに！」

②地方創生☆政策アイデアコンテスト 地方予選通過

- ・「3過疎地域を照らすライトアップ『ナイトエコノミー』～温泉からもう一歩外へ～」

③実社会でプランが実施(川北町の小学校で、川北“愛”検定実施)

- ・「川北“愛”検定～川北町と子供のつながりを深め若者増加の社会を持続的なものに～」

(1)6 71回生地域課題研究協力者一覧

- ・加賀市役所 農林水産課
- ・加賀市役所 地域振興部農林水産課
- ・加賀市役所 商工振興課
- ・加賀市役所 市民生活課
- ・加賀市役所 総務部企画課交通対策室
- ・加賀市役所 観光戦略部観光交流課
- ・加賀市役所 経済環境部商工振興課
- ・加賀市役所 加賀市長
- ・山代温泉観光協会
- ・片山津温泉観光協会
- ・加賀市スポーツセンター
- ・タビト學舎
- ・北陸エアターミナル
- ・加越酒造
- ・小松市役所 経営政策課
- ・石材荒谷商店
- ・大幡茶店
- ・小松市役所まちデザイン第一課
- ・小松市役所経済観光文化部観光交流課
- ・白山市役所鶴来支店 白山市観光連盟
- ・まちづくり加賀

- ・石川樹脂工業
- ・加賀ご当地グルメ推進協議会
- ・山中石川屋
- ・加賀フルーツランド
- ・日本旅行T i s 金沢支店
- ・日本政策金融公庫
- ・北陸財務局
- ・金沢市文化スポーツ局文化財保護課
- ・金沢市市民協働推進課
- ・庄保育園
- ・Art Shop月映
- ・サイクショップカガ
- ・北陸鉄道株式会社金沢営業所
- ・金沢商工会議所フードピア金沢開催委員会
- ・浅田屋
- ・金沢大学 教育実践センター
- ・金沢大学 知的計測制御研究室
- ・金沢大学 地域政策研究センター
- ・ベーカリーショップひなげし
- ・グランゼーラ
- ・手取フィッシュランド
- ・石川県立九谷焼技術研修所
- ・能美市九谷焼資料館
- ・小松精練
- ・伊野正峰株式会社
- ・川北町教育委員会 学校教育課
- ・川北町中島小学校
- ・吉野谷診療所
- ・白山白峰診療所
- ・浅野太鼓文化研究所
- ・吉田屋山王閣
- ・革工房 革ee
- ・山中保育園
- ・能都町役場地域財政課地域戦略推進室
- ・能登高校魅力化プロジェクトアドバイザー
- ・能登町地域おこし協力隊

- ・あさひ屋ベーカリー
- ・関西学院大学
- ・soil

(2) 71回生「地域課題研究」以降の生徒の自主的な活動

(2)-1 生徒有志による金沢まちづくり学生会議の参加

地域課題研究の発表にお越しいただいた金沢市市民局市民協働推進課の職員の方にお声かけいただき、「金沢まちづくり学生会議」に本校から10名（71回生8名・72回生2名）の生徒が参加している。「金沢新発見プロジェクト」として大学生、市役所、企業（米心）と連携して新しい商品開発を行ったり、4月から金沢で新たに暮らし始める県外からの大学生を対象とした街案内プロジェクトを企画したりしている。活動は月に2回程度、時間帯は18時30分～21時である。

授業で学んだ課題探究力・課題解決力・提案力・子ユニケーション能力等を発揮して、学校外でも積極的に地域創生活動を行っている。

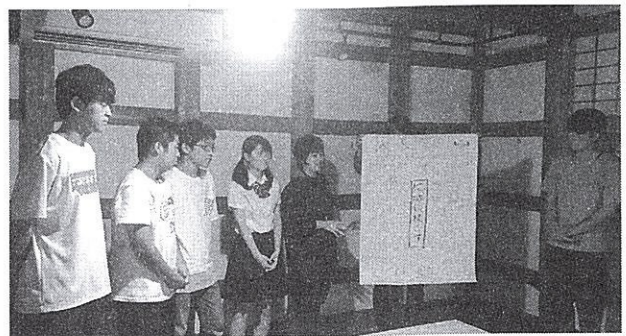


写真2 金沢まちづくり学生会議

(2)-2 Studio L山崎亮氏の講演に参加

川北“愛”検定を実施した川北町教育委員会の職員の方にお声かけいただき、地域が抱える課題を様々なプロジェクトを通して解決している山崎亮氏との交流の場を設けた。山崎氏は石川県野々市市で「地域包括ケア」を広めるプロジェクトを行う等、コミュニティデザインを行っている人物である。

このように、地域課題研究を通して興味を持った分野について積極的に話を聞きに行こうとし、思考を深めようとしている生徒が複数みられた。

(2)-3 新聞編集局によるPrima Pinguinoの取材

地域課題研究を通して地域創生に興味を持った新聞編集局の生徒が、石川県で地域創生の活動をしている方の話を聞きたいと考えて自分たちで調査し、藤岡慎二氏を取材した。藤岡氏は、教育の観点から地域創生、地域活性化を目指しており、隠岐島前高校魅力化プロジェクトに関わるなど、地域活性化の活動を行っている人物である。

取材を通して、生徒たちは地域創生はどうあるべきか、そして高校生はどのように関わることができるかについて考えていた。そしてさらにその内容を学校新聞に載せ、生徒の意識を変えようとする姿がみられた。



写真3 学校新聞の藤岡慎二氏の記事の一部

3. SGHプログラム2年次「グローバル提案」の実践とその後の生徒の自主的活動

(1) 71回生「グローバル提案」の実践・改善点

(1)-1 実践の概要

2年時のグローバル提案の学習は、「世界の人々が幸せに生きるためにはどのような提案をすることが現実的に可能であるかを模索し、各国の立場に立って交渉する学習活動を通して、生徒一人ひとりの今後の生き方について考える」ことを目的としている。学習内容としては、生徒が各国の大使及び議長になって模擬国際会議を行った。会議の目的は、「2050年の餓死者をゼロにすること」と設定し、採決の仕方は全会一致または多数決とし、論点によって調整した。

71回生では、「生徒主体の授業づくり」を意識してプログラムの開発を行った。教員は授業をつくる際に、目の前に生徒がいるにもかかわらず、「どんな力を身に付けたいか」「何をしたいか」ということを教員だけで考えてしまいがちである。71回生では、生徒と話し合う場面を多く設け、生徒の意見を積極的に取り入れ、どのような学習内容であれば、より多くの生徒が主体的に意味のあるものとして模擬国際会議を捉えて真剣に取り組むことができるかを念頭に置いて授業内容を改善した。

(1)-2 ホンモノを知る場面を設定

①「特別合同授業で元国連職員の方からSDGsについて学ぶ」

6月に実施した特別合同授業では、SDGsパートナーズ代表取締役CEOで元国連職員の田瀬和夫様に講演していただき、SDGsについて知る場面を設け、国際社会において、全ての国が共存できる取り組みを行っているという話を聞く場面を設定した。

②「東京現地学習で国際機関を見学」

71回生では新たに夏休みに2泊3日の東京現地学習を企画し、食糧安全保障の問題に関して様々な取り組みをしている国連機関や省庁及び企業等について

訪問し、具体的に世界にはどのような問題があり、それぞれの機関がどのような取り組みをしているかを見学及び調査する場面を設けた。

【訪問先一覧】

- ・ 日本科学未来館
- ・ JST（科学技術振興機構）
- ・ JETRO（日本貿易振興機構）
- ・ 農林水産省
- ・ 味の素
- ・ JICA（国際協力機構）
- ・ UNHCR協会（国連難民高等弁務官事務所）
- ・ フランス大使館
- ・ 日本ユニセフ協会
- ・ タイ大使館
- ・ WFP（国際連合世界食糧計画）
- ・ FAO（国際連合食糧農業機関）



写真4 FAO訪問



写真5 日本科学未来館訪問



写真6 タイ大使館訪問

②「SGH研究大会で外務省の職員及び海外留学生との交流会を実施」

11月に実施したSGH研究大会では、外務省職員、インドネシア、カンボジア、マレーシア、バングラデシュからの留学生にお越しいただき、世界の現状及び国際会議について講演していただく場面を設定した。生徒の学習を机上の空論で終わらせるのではなく、実際の国際会議はどのように行われているのか、またはその国々の現状はどのようなものであるかについて知る場面を用意して、生徒の思考を深めた。

(1)-3 教員主導から生徒主体の模擬国際会議へ

①「議長は生徒が務める」

70回生までは社会科の教員が行っていた議長を、71回生では生徒が務めることとした。これは、これまでの教員主導の授業から、生徒主体の授業へとシフトしたいという生徒の希望から行った初の取り組みである。「答えを教えること」「知識を与えること」が教員の役割ではなく、「生徒のやる気を高めること」「生徒の考えを引き出すこと」を教員の役割とし、議長を中心として、生徒同士が納得できるまで話し合えるよう教員は補佐役を務めることとした。1回目の模擬国際会議では、1年生の時に生徒の自主的な活動の一環として全国高校生模擬国際会議に取り組んだ経験のある3名を議長に指名した。2・3回目ではうまくリーダーシップを発揮できるであろう3名を追加し、計6名が議長を務めた。

②「担当国は生徒が決める」

70回生までの模擬国際会議では、「交渉力を伸ばす」「話し合いの技術を向上させる」ことに主眼をおいていたため、話し合いのしやすさから、どうしても先進国の占める割合が多くなっていた。しかし、71回生では、「世界の現状を知る」ことに一番力を入れようと生徒と共に考え、設定国の見直しを行うこととした。その際に、どのような国を設定すべきかを外務省及びFAOの職員の方に相談したところ、昨年度までの設定国は世界の情勢とかけ離れて

いるということを指摘され、71回生では発展途上国を多く取り入れることとした。また、2回目・3回目の国の設定については、「どの国を増やすと話し合いがしやすいか」「どの国を担当したいか」等について生徒と話し合いながら設定していった。その結果、2回目にはアジアや南アメリカを増やすこととし、3回目には日本を入れ、さらに話し合いのしやすさ、調べやすさを優先して国を設定したため、先進国を増やすことになった。

③「一人1か国を受け持つ」

どうすれば生徒一人ひとりが真剣にこの課題に取り組めるかを、生徒と話し合った結果、「1か国を担当する人数を減らすことで一人ひとりが責任を持って担当国について考えるようになるのではないか」という意見が生徒から多く出た。その結果、1回目は40人で12か国を担当していた（1か国を3人で担当する）が、2回目では40人で19か国を担当する（1か国を2人で担当する）こととした。国を増やし、担当する人数を減らしたことで積極的に参加する生徒が増えたものの、一方で、調べにくい国が多いこと、国が多すぎて全てを把握するのは難しいという意見が出た。それらの生徒からの意見を踏まえ、3回目の模擬国際会議は、20人で18か国を担当する（1か国を一人で担当する）こととした。また、設定する国も議長の生徒が決めることとした。

「一人1か国を受け持つことは生徒が負担に感じるため、難しいだろう」「話し合いが苦手な生徒もいるので、全員が1か国受け持つ方法は無理だろう」という意見の教員も多かったが、実際に行ってみると、多くの生徒が自分事として捉え、積極的に取り組んでいる様子が見られた。このことから、教員が一方的に方法を決めるのではなく、生徒と話し合いながら決めていくのが良いと考える。

○70回生での担当国（14か国…40人で実施）…先進国が多いのが特徴。

- ・先進国…アメリカ・オーストラリア・韓国・ロシア・ドイツ・フランス・サウジアラビア
- ・新興国…中国・インドネシア・ブラジル・インド
- ・発展途上国…南アフリカ・ナイジェリア・バングラデシュ

○71回生での1回目（5月実施）の担当国（12か国…40人で実施）…発展途上国を増やした。

- ・先進国…アメリカ・フランス
- ・新興国…中国・インドネシア・ブラジル
- ・発展途上国…
(アフリカ)エジプト・コートジボワール・ケニア・エチオピア
(アジア) タイ・バングラデシュ
(南米) ペルー

○71回生での2回目（7月実施）の担当国（19か国…40人で実施）…発展途上国同士でチームが組めるように、アジア・南米も増やした。

- ・先進国…アメリカ・フランス・ポーランド
- ・新興国…中国・インドネシア・ブラジル・インド・トルコ
- ・発展途上国…
(アフリカ)エジプト・コートジボワール・ケニア・エチオピア
(アジア) タイ・バングラデシュ・ネパール・ラオス
(南米) ペルー・コロンビア・メキシコ

○71回生での3回目（11月実施）の担当国（18か国…20人で実施）…一人1か国担当。議長の生徒が国を設定した。

- (Aチーム・Bチーム)
- ・先進国…アメリカ・フランス・日本・フィンランド・カナダ
- ・新興国…中国・インド・インドネシア・サウジアラビア・イラン

・発展途上国…
 (アフリカ)エジプト・エチオピア・ケニア・ナイジェリア
 (アジア) バングラデシュ・タイ
 (南米) コロンビア・メキシコ

(Cチーム)
 ・先進国…アメリカ・フランス・日本・ノルウェー・オーストラリア
 ・新興国…中国・インド・インドネシア・ロシア・サウジアラビア・イラン
 ・発展途上国…
 (アフリカ)エジプト・エチオピア・ケニア・ナイジェリア
 (アジア) バングラデシュ
 (南米) コロンビア・メキシコ

(Dチーム)
 ・先進国…アメリカ・フランス・日本・ノルウェー・オーストラリア
 ・新興国…中国・インド・インドネシア・ロシア・サウジアラビア・イラン
 ・発展途上国…
 (アフリカ)エジプト・エチオピア・ケニア・ナイジェリア・コートジボワール
 (アジア) バングラデシュ・マレーシア
 (南米) コロンビア

(Eチーム)
 ・先進国…アメリカ・フランス・日本・ノルウェー・ドイツ
 ・新興国…中国・インド・インドネシア・ロシア・サウジアラビア
 ・発展途上国…
 (アフリカ)エジプト・エチオピア・ケニア・ナイジェリア・コートジボワール

(アジア) バングラデシュ・マレーシア
 (南米) コロンビア

(Fチーム)
 ・先進国…アメリカ・フランス・日本・ノルウェー・ドイツ・オーストラリア
 ・新興国…中国・インド・インドネシア
 ・発展途上国…
 (アフリカ)エジプト・エチオピア・ケニア・ナイジェリア・コートジボワール
 (アジア) バングラデシュ・マレーシア
 (南米) コロンビア・メキシコ

④「論点やアウトオブアジェンダは生徒が決める」
 1回目の模擬国際会議では、論点を「農業技術」として話し合いを行った。最初に「農業技術」を設定した理由は、各国の立場が明らかになる論点であるからである。正確な情報を各自が入手し、それをもとに「国益を守るために譲れないことは何か」「目的を達成するためにはどう交渉するべきか」について考えることとした。2回目の模擬国際会議では、1回目の論点に「土地と水資源」をプラスして話し合いを行った。昨年度までは、「バイオ燃料」を論点としていたが、1回目の模擬国際会議を実施したところ、水資源のことを提案にあげるクラスもあった。そのため、予定していた論点を変更し、1回目と同様、「生産を増やす」ということを意識させる内容とし、「土地と水資源」を論点としてプラスすることとした。

計2回の模擬国際会議を経て、「より現実に近い提案をしたい」という生徒からの意見も多く出た。二国間交渉、多国間交渉、輸送コスト、国際情勢、教育等について、1回目・2回目の模擬国際会議ではアウトオブアジェンダに設定していたが、3回目からは、アウトオブアジェンダについても生徒同士で話し合いをさせながら各チームで設定していくこととした。3回目の論点に関しても、「農業技術」「土地

と水資源」に新たに「食肉消費」「バイオ燃料」を追加し、需要と供給の両面を取り入れる内容とした。論点を増やし、アウトオブアジェンダを減らすことで、話し合いの幅が広がって難しくなるという点もあるが、生徒一人ひとりが納得のいく方法で話し合いを進めていくことを優先にして学習を進めた。

⑤「何のための採決か」

採決に関しては、全会一致とした。しかし、1回目の模擬国際会議で採決をとった後に、「提案のつぶし合いになってしまう」という意見が出た。模擬国際会議を行う目的は、良い提案を考えることではない。提案が可決された場合には、「出された提案が本当にその国の国益を損なわないものであるか」を吟味したり、「その提案は現実的に可能なものであるか」を検討したりすることが大事なのである。また、提案が否決された場合には、「その提案をどのように変更すれば受け入れることができるのか」を考え、「2050年の餓死者をゼロにするという目的を達成するために、自国は何ができるのか」を具体的に皆で検討していくことが大事なことである。そのため、採決の後に、その提案を見直し、皆で話し合う時間を十分にとることとした。

⑥「教員の役割とは」

71回生では、「教員もどこかの国を担当する」という形で国語科3名、数学科3名、英語科1名、社会科4名（内管理職2名）、理科1名、保健体育科2名、養護教諭1名の15名の指導体制を整えた。教員の役割は教員一人ひとりそれぞれ違ってよいはずである。考え方を指導する教員もいれば、生徒の疑問に寄り添う教員もいる。また共に考える教員も必要であるし、グループ活動（生徒間の仲）を調整する役割の教員もいる。また、知識を与える役割を果たす教員もおり、考えのヒントを積極的に与える教員もいる。

教員一人ひとりが自分の役割を見出すよう依頼した。そのため、打ち合わせを大事にし、声掛けの内

容についても確認を行った。教えることだけが教員の役割ではない。共に考え、生徒の力を引き出す声掛けをすること、また集団活動であるため、精神的な安心を与えることも教員に求められる力であろう。

⑦「誰のための、何のための評価をすべきなのか」

「評価」は生徒のやる気を引き出すためのものであるべきである。そのため、模擬国際会議を通して「どのような力が身に付いたか」を生徒一人ひとりに振り返らせ、さらに今後の学習の中で「どのような力を身に付けたいか」に関して聞くアンケートを複数回実施した。それらをもとに学習内容を改善し、生徒が達成感を感じるものへとその都度変更していった。

また、「評価」は教員が学習内容の見直しを行うためのものであると同時に、生徒が学ぶ意義（目的）を明確に意識するためのものでもあるであると捉え、会議を行う前には、どのような力を身に付けたいかを生徒と共に模索するように工夫した。

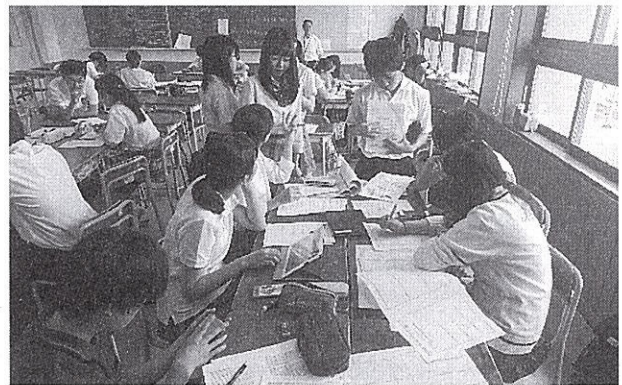


写真7 模擬国際会議議長が指示する場面

(2) 71回生「グローバル提案」以降の生徒の自主的な活動

(2)-1 飢餓体験プロジェクト実施

本校のグローバル提案の学習で模擬国際会議を行うなかで、複数の生徒から「実際に自分たちもアフリカの食の体験をして、より現実的な提案をできるようにしたい」「どんなに自分たちが話し合いを行っても実感として飢餓が理解できないので、飢餓とはどういうものかを体験したい」という意見が出た。

そのため、11月に3日間、約50名の本校の生徒及び教員を対象に飢餓体験プロジェクトを実施した。具体的な内容は、3日間連続、昼食時間に実施することとし、1日目はキヌアご飯のみ、2日目はキヌアスープのみ、3日目はキヌアのみを食べて午後の活動を行うというものである。実際に飢餓を体験するなかで、貧困に苦しむ国の人々がどのような状況なのかを理解し、グローバル提案での提案内容に関してもより具体的に考えられるようになったようであった。

このように、生徒自身から「学習の効果を高めるために、〇〇したい」という意見が出ただけでなく、さらにそれを、多くの生徒を巻き込む形で実践することができた。この体験は、グローバル提案が終了した3学期以降にも継続して実施しており、「他の生徒にも、もっと世界の貧困を知ってもらおう」「他の生徒にも、世界の状況に目を向け、高校生の自分にできることを考えてもらおう」という生徒の意識の高さを知ることができた。

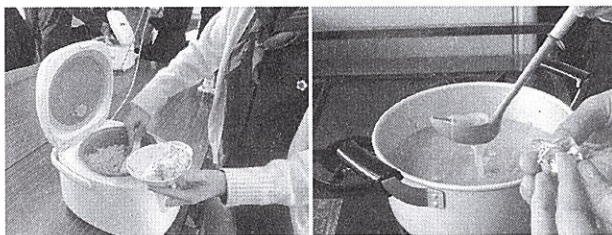


写真8 飢餓体験プロジェクト

(2)-2 全国SGHフォーラムでの生徒投票賞受賞

本校のグローバル提案のプログラムは11月で終了した。その後、さらに食糧問題に関する発展的な探究を行いたいと申し出た1グループが「高校生一人ひとりの力で国際社会の課題を解決しよう」というテーマで探究活動を行い、12月に行われた全国SGHフォーラムで発表をし、生徒投票賞を受賞した。その発表以降も、本校生徒だけでなく石川県にある複数の高校（泉丘高校・二水高校等）に協力していただき、生徒の意識を探るアンケートを実施したり、金沢市役所と連携して(4)-1で記した飢餓体験プロジェクトを企画したりする等、高校生の気持ちを動

かすプロジェクトを提案した。

このように、外部発表の場面では、授業で学んだことの発表でとどまるのではなく、生徒自身が新たに発展的課題を設定し、探究した内容を堂々と発表できていた。また、主体的に地域の他の学校と連携し、さらに学校全体を巻き込んだ企画を計画的に行い、そしてその結果を分析する姿が見られた。

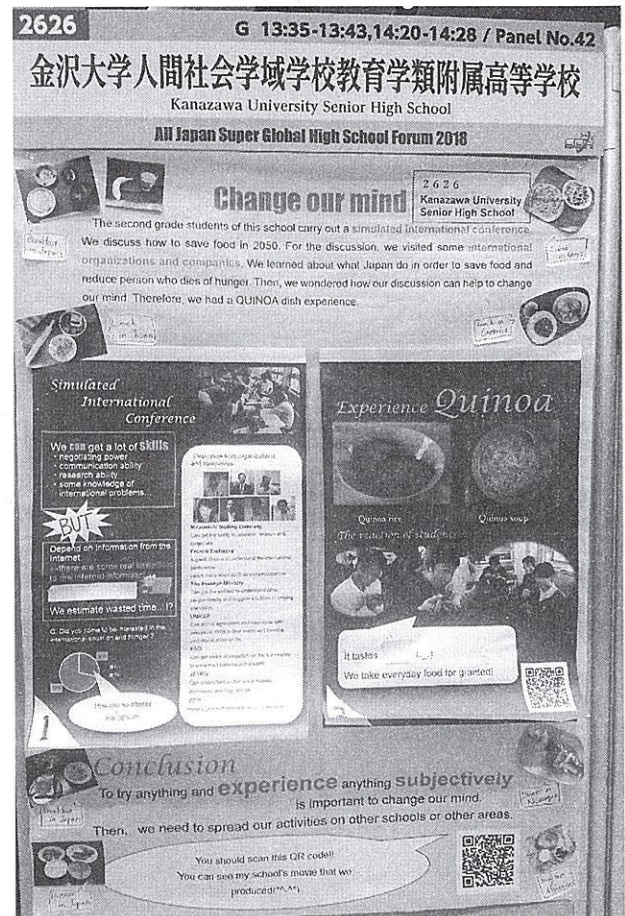


写真9 SGH全国フォーラムで発表したポスター

(2)-3 SGH甲子園への参加

本校のグローバル提案の学習では食糧問題について着目し、一人ひとりがそれぞれの国の大使になって話し合いを行ったが、その学びのなかで、「自分が担当したアジアの国の貧困について詳しく探究したい」と申し出たグループが1つあった。その生徒たちは「AI技術でアジアの貧困を解決する方法を考える」というテーマで探究し、3月のSGH甲子園に参加した。

このように、外部発表の場面では、授業で学んだことの発表でとどまるのではなく、そこからさらに生徒自身が興味のある分野と併せて発展的課題を設定し、探究した内容を堂々と発表できていた。また、積極的に外部機関へ取材し、そしてその結果を分析する姿が見られた。

(2)-4 北信越SGHフォーラムへの参加

本校のグローバル提案の学習が11月に終了後、20名の生徒がSDGsに関する自主的な探究活動を引き続き行いたいと申し出た。その生徒たちを5グループに分けて、世界の食糧問題及び貧困に関わる内容でさらに発展的なテーマをグループごとに設定し、放課後や休日等の時間を用いながら探究活動を行った。そしてその成果を3月の北信越SGHフォーラム等で発表した。

このように、本校の授業で学んだ内容を踏まえてテーマを新たに設定し、そのテーマについて探究し、さらに大勢の前で発表する場への参加を積極的にもちたいと考える複数の生徒の姿が見られた。教員が強制したり指示したりして生徒に行わせるのではなく、生徒一人ひとりが興味をもって学びたいと考えている様子が見られた。

4. SGHプログラム2年次「グローバル・キャリアパス」の実践とその後の生徒の自主的活動

(1) 71回生「グローバル・キャリアパス」の実践・改善点

(1)-1 実践の概要

グローバル・キャリアパスは、70回生までは3年時の1学期に設定されており、「自己の特徴を認識し、高校でのさまざまな学びを踏まえて、持続可能な共生社会を創生するための自己の将来像を構想し、そこに到達するキャリアパスを考える」ことを目的としている。

71回生では、まず自己の将来像を構想するために必要である「様々な進路を知る場面の設定を増やす

こと」に力を入れてプログラムの開発を行った。

グローバル・キャリアパスの時期を早めたのは、同窓生及び70回生の生徒からの「3年生になってからでは遅い」「履修指導は2年次の冬にあり、自己の進路は決まっている3年時よりも以前に行う方が望ましい」という意見を踏まえたものである。その結果、初の試みとして2年次に実施することとした。

(1)-2 同窓生を知る場面を豊富に設定

①「2年次7月 東京現地学習での企業訪問」

「本校の同窓生の多くは、大学進学後に石川県に戻ってこない」というのが現状である。そのため、高校を卒業し、東京大学をはじめとする優秀な大学へと進学した後、どのような会社で働き、どのように生活しているかを知ることが難しい。

そのため71回生では新たに東京現地学習を企画し、複数の先輩方を訪問する機会を設け、「どのような大学に進学し、その会社に入ったか」「会社ではどのような仕事をしているか」について、直接話を聞く場面を設定した。石川県には知ることのできない情報を具体的に得ることができ、生徒たちは大きな刺激を受けていた。

【訪問先一覧】

- ・日本銀行
- ・日産自動車
- ・総務省
- ・三菱商事
- ・小学館
- ・フジテレビ
- ・東芝メモリ
- ・ファンケル
- ・外務省
- ・読売新聞
- ・JR東日本
- ・三菱ケミカル



写真10 外務省訪問



写真11 日本銀行訪問



写真12 フジテレビ訪問

増した様子が見られた。

【見学先大学】

- ・ 東京大学
- ・ 東京工業大学
- ・ 一橋大学
- ・ 東京外国語大学
- ・ お茶の水女子大学
- ・ 慶應義塾大学
- ・ 早稲田大学



写真13 東工大訪問



写真14 東大訪問

② 「2年次7月 東京現地学習での大学見学・座談会」

「本校では進路指導の一環として大学調べ等を組織的に行っていない」というのが現状である。そのため大学に関する知識の量は生徒一人ひとり異なっている。

71回生では、東京にある大学を見学する機会を設け、さらに座談会を企画して現役の大学生と直接話をし、「どのように受験勉強に取り組んだか」「大学ではどのような学問をしているか」「大学生活はどのようなものか」等について話をする場面を設定した。多くの生徒が進学するであろう大学の先輩からの話を直接聞くなかで、自己の学習に対する意欲も



写真15 大学生との座談会

③「2年次7月 石川県で活躍する同窓生による進路講話」

2年生の夏の段階では、まだ進路が明確に定まっていない生徒も多い。そのため、石川県で活躍する同窓生12名にお越しいただき、「石川県で働く理由」「なぜその仕事に就いたか」「仕事にどのようなやりがいを感じているか」等について具体的に話を聞く場面を設定した。将来石川県で働くか、それとも都会に出るかを迷っている生徒にとっても良い機会になっていた。また本校には医学部志望の生徒も多いが、漠然と思いついているだけの生徒が大半で、具体的なことについては知らない生徒も多い。高校2年生の段階で具体的な仕事内容知ること、本当に自分がしたいことは何かを見つめ直すきっかけになっていた。

【講師の所属先一覧】

- ・PFU株式会社
- ・北陸先端科学技術大学院大学
- ・金沢大学附属病院
- ・県立中央病院
- ・名祥株式会社
- ・メディアテック
- ・藤野法律事務所
- ・北陸放送
- ・EIZO株式会社
- ・石川県総務部
- ・オリエンタルブルーイング株式会社



写真16 PFUで働く同窓生の講話

④「2年次8月 石川県の企業訪問」

7月に進路講話でお世話になった方の会社を中心に、8月石川県の企業見学を実施した。このような企業訪問は初の試みである。生徒は7月に実施した東京現地学習で都会（東京・神奈川）の会社も見学しており、都会の企業と地元の企業を、また、都会で働く先輩と地元で働く先輩とを比較し、自分自身はどのように生きていくのかを具体的に考えるきっかけになっていた。

【訪問先一覧】

- ・北陸先端科学技術大学院大学
- ・金沢大学附属病院
- ・オリエンタルブルーイング株式会社
- ・県立中央病院
- ・金沢地方裁判所
- ・北陸放送
- ・EIZO株式会社
- ・石川県庁

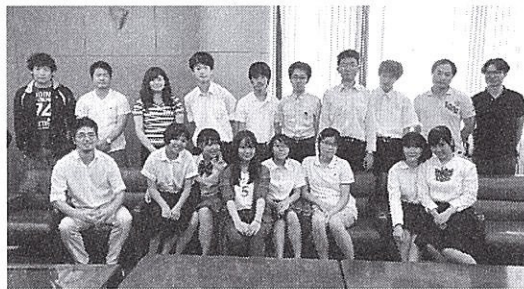


写真17 JAIST訪問

(1)-3 eポートフォリオの活用

70回生までが3年時で行っている高校2年間の経験と学びを振り返る「学びの履歴書」はeポートフォリオの作成へとシフトした。

2年間の経験と学び（「総合的な学習の時間」、教科、生徒会・行事・部活動・特別授業、各種コンクール・ボランティア・外部セミナー・留学体験・地域貢献等自主的活動での経験と学び、その他の経験）についてまとめ、自己を肯定的に認め、振り返る機会とした。

(2) 71回生「グローバル・キャリアパス」以降の生徒の自主的な活動

(2)-1 新聞編集局による同窓生の取材

グローバル・キャリアパスを通して同窓生の生き様に興味をもった新聞編集局の生徒が、都会で活躍している同窓生の話を知りたいと考えて自分たちで取材した。取材を通して、生徒たちは、自分たちは将来どのようになりたいか、そして高校生の今何をすべきかについて考えていた。そしてさらにその内容を学校新聞に載せ、生徒全体に伝えようとする姿がみられた。

5. おわりに

生徒一人ひとりを生涯にわたって学び続ける大人に育てるためには、「たくさんの体験の場を設けること」、「生徒が主体的に活躍できる場を設定し、生徒の取り組みを個に応じて前向きに支援すること」、「協働的に活動する場を設定し、生徒一人ひとりが意見を出しやすいよう工夫すること」が必要となる。そのための組織をつくりあげるためには、学校内にとどまっていたは何もできない。地域とのつながり、同窓生とのつながりを持ち、それらと組織的に連携してプログラムを開発し、さらに改善を重ねていくことが大切であろう。

このような取り組みを通して生徒の好奇心をくすぐりながら、生徒一人ひとりを新たなことや困難なことに挑戦する勇気をもった大人に育てることができるのである。そのためには、むしろ私たち教育者も、学ぶことを楽しみ、そして新しい企画にチャレンジしていく勇気を持ち、周りの教員と協力しながら実践していく覚悟を持つ必要があるであろう。

取材⑤ 三菱商事

〈41回生〉**角田有希子さん**



三菱商事は地球環境・インフラ事業やエネルギー事業など幅広い産業のビジネスを世界中で展開する総合商社である。新産業金融グループ総合リース事業部の角田有希子さんにインタビューをした。世界を相手にする難しさはどのような点でしょうか。

まず、事業 商材がエネルギー！食料や機械・自動車など多岐に渡るので、若手にも担当商材へのプロフェッショナルリズムが必要になる点です。また、各業界全体を成長させる仕事をしなければ総合商社は衰退するので、新規ビジネスを目指し非資源分野を中心にプレッシャーが重く押し掛かっています。世界各地の事業環境が急激に変化するなかで、各営業本部の活動領域の重復や抜け落ちることが増えてくるのも難しい点です。模範国際会議ではどんな力が得られるでしょうか。

「グローバル人材」はどのような人材だと思いますか。高い倫理観と当事者意識を常に

模範国際会議はリサーチ能力・分析力を養う絶好の機会です。また、ディスカッションで身に付く交渉術、ビジネスを行ううえで得る人脈、知識などのスキルは、実社会で新規事業を創出することにつながります。事実、当社では社員が中長期的ビジョンを持つことが求められるので、常にアンテナを張り、市場動向や社会情勢を捉える必要があります。今無駄かもしれないと思うことも将来必ず役に立ちます。チャンスは自分で作るもの。目標とする姿、働き方をイメージして努力することが大切です。

「グローバル人材」はどのような人だと思いますか。高い倫理観と当事者意識を常に

持ち、語学力も含めて自己研鑽を積める人だと思います。語学力は必要ですが、ビジネスの場ではコミュニケーションのツールに過ぎません。大切なのは、仕事の知識を身に付けたうえで自分の意見や考えを積極的に話し、存在感を示すこと、また、プレゼンテーションにおいて話題をきちんと整理し相手に伝えることです。さらに、交渉相手に対し、常に「本社に確認しないとわからない」では見くびられることもあるので、自身で取れるリスクと取れないリスクの見極めが肝だと思います。その過程では、国によって異なる法令・慣習を徹底的に学ぶこと、コンプライアンスを意識することも重要です。

写真18 学校新聞の同窓生の記事の一部